

四つの情景（生態陳列）

富田 惣七

まず第一に、それが学問的にも間違いのない状態で構成されなければならない。という、私どもにとっては大変な問題がありました。

4つの情景のテーマとモチーフは、熊谷市長と初代の館長堀先生との間で決められたわけですから、私どもにもし、これに代わるモチーフの案があったとしても、たぶん総合的な点から、これ以上の名案とはならなかったであらうでしょう。

今頃になってこんな話でもありませんが、この生態陳列が、一度春と冬のケースの大修理をした後、昨今又多少の破損がみえてきて、少しづつ手を入れなければならなくなった事から、製作当時の、ない智慧をしばってわれながらこれは名案とひびをたいてよるこんだあれやこれやの事どもが思い出され、それにつけても生態陳列というものゝむつかしさが今更のように考えられます。

御存知のように、博物館が建設中で、まだどンドンコンクリートを流しこんでいるとき、すでに流しこみだけ終った一階から仕事を始めるというので、博覧会の期日に尻をたくかれた格好で、まだぐしゃぐしゃのところへ四つのケースを作ったわけですから、それがそう何時までもよい状態ですくわけがありません。先にも書きました通り、春と冬の背景の合板にかびがはえ、そうこうするうちに腐ってぼろぼろになってしまいました。

この二つのケースは、殆んど初めからやり直す程度の大修理をしました。

生態陳列というものゝ意義は、私どもにはよく分らぬ事ですが、たしかに学問に向い合う一般の人々にとって、それは、直感的に受取ることの出来る一つの手だてになりましょう。それだけに、学問的に正しいという事と今時に、一種の面白さもあり、とにかく人の眼をひくだけの何かの要素をもっていなければならないものと思はれます。

これを作り初める前、私は上野の科学博物館の生態陳列を見学に行き、本田さんという文部技官にお会いして、いろいろお話をおきました。その上で生態陳列を見たわけですが、正直のところ感心しませんでした。

単にナチュラルな状態を作り出す、自然そっくりそのままのものを作る、というのではだめだという事を、それを見て感じました。

科学博物館のものは、まさにそれであったために、自然をまねた、という事がかえって一つの弱みになっていた様でした。そこで私は、創作という事の大事さを感じたわけです。

例えば、東尋坊の海底は、実際の海底の感じをもっていますが、決してそっくりそのままではありません。実際の海底とは全く違ったものなのです。

しかしそれが、如何にも海底のものであるような、なまなましさを感じさせる。そういうものでなければならないと、私どもは、その事に熱中しました。

そして私どもは、そのとき、科学への誘いの場合には、いろいろな創意と工夫と研究が必要であることを感じました。

福井女子高等学校 教諭

その当時に、生態展示の傑作と、朝日新聞の天声人語でほめたゝえられたことがあります。

昨年（昭和45.9）神奈川県博物館協議会と交換研究会を当市で催しました。その折神奈川某博物館長が東京の科学博物館で「生態展示の模範となるものを。」と尋ねたところ、福井市の博物館の展示を見て来なさいとの指示があったと聞かされました。

編集者 付記